

立	命	館	の	
民	主	主	義	を
考	え	る	会	元教職員

第1回フォーラム&結成集会

報告集

2008.2.15発行

発行元「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」

フォーラム

## 【テーマ】『立命館の民主主義は、今？』

【開会挨拶】 コーディネーター 芦田 文夫氏 (元副総長)

### 【問題提起】

**岩井 忠熊氏 (元副学長、教学担当常務理事)**

——多様な意見を率直に出し合おう—立命館学園の民主主義のために—

**佐々木 嬉代三氏 (元副総長)**

——「変質」と「抑圧委譲」—学園の現状の社会的分析—

**稲葉 和夫氏 (立命館大学教職員組合執行委員長)**

——立命館が築き上げた貴重な財産、誰が台無しにしようとしているのか

### 【まとめ】

コーディネーターとしてのフォーラムまとめ

- 結成宣言
- 参加者の感想文

フォーラム開催日時：2007年12月22日 (土) 午後2時～4時30分  
開催場所：立命館大学—衣笠キャンパス 至徳館 4F 401号室

主催 「立命館の民主主義を考える会 (元教職員)」  
共催 立命館大学教職員組合

## 「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」 結成宣言

「平和と民主主義」という教学理念は、戦前の反省を踏まえつつ、新しい時代の立命館を象徴する基本的精神として、脈々と受け継がれて参りました。幾度かの学園危機に際しても、この理念は学園を統一する上で大きな役割を果たすとともに、全学協議会方式をはじめとする民主的な学園運営の基本的制度として具体化されて参りました。

しかしながら、ここ数年、この伝統ある民主的な学園運営の原則が崩されてきているという声が、あちこちで聞かれるようになりました。なかでも、マスコミに報道された幾つかの出来事が、学園構成員の間に深刻な亀裂を招き、不信を広げていったと語られています。聞くところによりますと、一時金削減は教職員組合との十分な議論なしに強行され、前理事長・前総長への退任慰労金倍増は常任理事会を経ずに一般理事会のみで決められました。学園指導部の「専断」的なやり方が目に余り、「自由と清新」の気風が揺らぎつつあるように感じます。

私たちは、すでに退職した元教職員ですが、このような現状を黙視するに忍びません。民主主義を築く中心は、もちろん現役の教職員であり学生であります。しかし民主主義の危機に際しては、父母や校友をも含めて学園を愛する者たちが共に立ち上がる必要があると考えています。私たち退職教職員もまた、学園の民主主義を守り発展させる運動の一翼を担いたいと切実に願っています。

このような願いを込めて、ここに私たちは、「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」を結成します。現教職員や学生をはじめ立命館の民主主義の再生を望むすべての人びとと共に、語り合い意見を交わし、私たちにふさわしい行動を追求したいと考えています。

私たちは今後とも呼びかけ人を増やし、この趣旨に賛同する人をさらに多く結集していくつもりです。すでに私たちは自らの思いを「私の意見」として公表し、本日第1回のフォーラムを開催しました。こうした取り組みを今後とも粘り強く継続する決意です。継続は力です。焦ることなく慌てることなく、正々堂々と立命の未来を切り開こうではありませんか。

2007年12月22日

「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」

**呼びかけ人**(50音順)

[2007年12月20日現在]

芦田 文夫、 荒川 重勝、 安藤 哲生、 井上 純一、 岩井 忠熊、 小野 一郎  
加藤 直樹、 小檜山 政克、 佐々木 嬉代三、 佐藤 嘉一、 杉野 囃明、 辻村 寛  
友藤 信明、 廣末 良子、 宮澤 正男

**賛同者**(50音順)

[2008年2月7日現在]

朝日 稔、 芦田 文夫、 荒川 重勝、 安藤 哲生、 石田 昌幸、 石飛 幸子  
伊藤 堅二、 伊藤 武夫、 井上 純一、 岩井 忠熊、 岡尾 恵市、 奥地 正  
奥村 功、 小野 一郎、 恩田 良昭、 笥 文生、 香積 学、 加藤 直樹  
川上 勉、 菊井 禮次、 桑原 博昭、 小檜山 政克、 小村 英一、 坂野 光俊  
阪本 欣三郎、 佐々木 嬉代三、 佐藤 嘉一、 杉野 囃明、 須田 稔、 園田 充則  
高木 彰、 高橋 悠、 田坂 和美、 田中 宏道、 辻村 寛、 津田 孝司、 堤 矩之  
戸木田 嘉久、 友藤 信明、 中村 泰行、 中山 康之、 永原 誠、 浪江 巖 廣末 良子  
藤原 莊介、 二場 邦彦、 松田 全功、 南 直樹、 宮澤 正男、 三好 正巳、 森野 勝好  
山口 幸二、 山本 岩夫、 両角 正子、 若井 勉、 和田 武

「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」(略称「考える会」)には、「代表」、「副代表」をおくこととし、「顧問」をおくことができることにしたいと思います。

「事務局」を設けると共に、「考える会」を支えていただくために、元教職員以外の方も含めて「世話人」をお願いする予定です。「考える会」は、近くホームページをつくり、さまざまな連絡の統一的な場所を得たいと考えています。

「考える会」はできたばかりで、人的物的基盤がありません。元教職員に限らず、「考える会」の活動及び財政にご協力いただけるならば大変ありがたく思います。賛同される方、ご協力いただける方からの連絡は、当面、以下のところをお願いいたします。

事務局員：井上 純一、加藤 直樹、友藤 信明、広末 良子、宮澤 正男

\*事務局連絡先：立命館教職員組合・宮澤気付(メール：[miyazawa\\_rits@yahoo.co.jp](mailto:miyazawa_rits@yahoo.co.jp))

Tel：075-465-8200 Fax：075-465-8201 『考える会』メール：[rits.democracy@gmail.com](mailto:rits.democracy@gmail.com)

なお、「考える会」役員は次の通りです。

代 表 芦田 文夫

副代表 佐々木 嬉代三

顧 問 岩井 忠熊、戸木田 嘉久

## 【第1回フォーラム】 フォーラムテーマ『立命館の民主主義は、今？』

主催：「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」準備会

共催：立命館大学教職員組合

### 冒頭の挨拶

#### コーディネーター 芦田 文夫 (元副総長)

いま、「立命館の民主主義」が岐路に立たされているように思います。学内ではかつてない断層がひろがり、学外からも疑問と批判が投げかけられ、「自浄能力」を求める厳しい声が寄せられるようになってきました。いわば学園の外と内との接点に立つものとして、また、これまでの歴史と現在の接点にたつものとして、私たち元教職員もなんらかの努力をしていかなければならないのではないか、学園関係者全体が力を合わせていかなければならないのではないか、と考える「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」の結成を呼びかけた次第です。「ニュース3号」で岩井忠熊先生が訴えておられるように、いま「さまざまな意見をたたかわすことが急務」だと思います。もし、学園に言論の閉塞状況がうまれているとすれば、それがいちばん危険なことです。私たちは、まずは元教職員の率直な声を集めて、現役の皆さん方とも交流をしていきたい。また、必要に応じてシ

ンポジウムやフォーラムを開いていきたい、と考えています。今日は、そのスタートのための集いで、このような活発な論議が必要であるということを確認し合うというのが、今日のフォーラムの趣旨だと思います。はじめに、3人の方から問題提起の発言をいただき、後はフロアーからも含めて自由な意見を出し合ってもらいたいと考えています。

問題提起をお願いしたのは、最初に岩井忠熊さん——元教職員のなかでは最年長層に属しておられ、「立命館百年史」第1巻(戦前)の編纂の責を担われた方で、歴史家でもあり現在の事態をすこし長い歴史的スパンで考えていく視点を出していただけるのではないかと考えています。次に佐々木嬉代三さん——比較的最近まで学園の執行機関に関わっておられた角度からアプローチしていただきたいと思います。最後に稲葉和夫さん——現役の教職員の立場から問題を出していただきたいと思

### 【問題提起】

#### 問題提起 1.

#### 多様な意見を率直に出し合おう—立命館学園の民主主義のために—

岩井 忠熊 (元副学長、教学担当理事)

#### 戦後再生の希望と誇り

私は 1949 年、20 歳代の若造の時から定年まで 39 年間、立命館の教員をつとめました。その頃はまだ戦争の傷跡がいたるところに見られ、国民はみな食うや食わずの状態、前途

に明るい希望を見出せない有様でした。その内に朝鮮戦争がはじまり、国内ではレッド・バジーの嵐、松川事件をはじめとする奇怪な事件の連続など、私たちは不安な日々を送らざるとえ

ませんでした。

しかし、そのような生活の中で見いだしたただひとつの光明は、日本国憲法、教育基本法の理想を追求すれば、いつかは明るい日がやってくるだろうという希望だったのです。だから「平和と民主主義」を教育理念とする戦後の立命館学園で仕事をするのは一実には当時の立命館は施設その他みすばらしいものでした。が一誇らしくやり甲斐のあることだと信じて、喜びにあふれたのです。

当時の私たちは非常に貧しく、研究費はおろか最低の生活費すら保障されていませんでした。

私は今までタバコを全く吸ったことがありません。あのころタバコを買う金があったら芋でも買おうという有様で辛うじて命をつなぎ、その惰性が今までつづいてきただけの話で、別にほめられることだったわけではないのです。あの時代、まだ個研費や学会出張旅費の制度すらなく、ただ食いつないで教育と研究をあきらめなかつただけです。

### 時局に便乗した拡張への反省

戦前の立命館にも、まともな研究や教育をされた尊敬すべき先人たちがおられました。しかし中川小十郎総長が台湾銀行の仕事が終わって京都に帰住されてから、立命館が国家主義的、軍国主義的色彩をつよめ、いわゆる「禁衛隊立命」として社会にひろく知られたことは否めない事実です。哲学科を国体学科に、文学科を東亜文学科に改称し「満州国」技術者養成を名目として、日満高等工科大学という現在の理工学部の前身を設置するために50万円の資金を同国政府から引き出しました。それが今日の衣笠校地の起源です。つまり立命館はたくみに時局に便乗して学園の拡充を実現したのです。こうした事情のために、戦後の一時期には連合軍から危険な軍国主義、超国家主義的学園として取

りつぶされるのではないかとさえうわさされたのです。中川総長の急逝後に学園の実質的最高責任者だった石原広一郎氏がA級戦犯容疑で巣鴨拘置所入りする直前に、なんとか廃止の危機を免れるために、末川博氏を学長にえらび、後事を委ねられました。この緊急措置が効を奏して立命館は存続できましたが、神宮皇學館大学は廃学、拓殖大学は紅陵大学と名称変更となったのです。このようにして立命館は末川先生の唱えた「平和と民主主義」の教学理念をかかげる学園として再生しました。

### 学生・教職員の運動に支えられ

「平和と民主主義」の教学理念は立派ですが、正直にいえばその理念を現実化するための具体的な条件はたいへん貧困だったばかりか、それを阻害する要因もまだかなり強かったのです。教職員組合、学生自治組織と各学部長をふくむ学内理事会との協議のための全学協議会はこうした「平和と民主主義」を実現する上で決定的な役割を果たしました。勿論協議会は決議機関ではありませんし、しばしば意見の不一致を確認するに終わりましたが、いつでも一致したのは公費助成運動の取り組みの強化です。理事会もそこでの議論内容を重視してできるだけ実現に努力しました。それでとにかく学内一致を維持できたのです。『立命館百年史』第二巻はその経過をくわしく解明しています。大雑把にいえば、組合の要求によって給与の規定や体系ができ、個研費、研究旅費、教員個室が整いました。社会科学系学部の小集団教育や共同研究施設費等は、学生自治組織の強い要求によって実現されたものです。こうした要求は教授会や当時の学内理事会によって支持・承認され、理事会が実現しました。全学協議会の役割は肯定的に評価すべきです。理事会はそうした論議の問題点を広く深く受けとめて臨時調査委員会や何べんもの長期計画委員会が組織さ

れ、その答申にもとづいて政策が立案され、実現していったのです。

### 大学人の見識と社会からの信頼

こうした学園一体のあゆみの中で決定的な存在意義をもったのはやはり大学の動向だったことは否定しえません。かつて私が『立命館百年史紀要』（第12号）にのせた拙文から引用させていただきます。「学園の第一の役割は人類の知的な遺産をその到達点までつたえることである。しかしただそこに踏みとどまるだけでは、学園は停滞し、あらたなエネルギーをうしなってしまうだろう。必要なことはいつも時代の先端を切り開く気概をもちつづけ、努力をつみ重ねることである。」また「およそ学問の府を以って任ずる者は目前の現象に目をくらまされずに、毅然として時代を超越し批判する見識をもたなければならない。世俗的な利害をはなれて真理を主張する役割を放棄するならば、大学に対する社会の尊敬はうしなわれるであろう。しかし他方で時代の要求と現実に対する考慮を欠けば、大学をよりどころとする主張は一個の観念論と化して、社会から浮き上がった存在とならざるをえないであろう。

学問的真理に立脚した超越的な見識と柔軟な現実的感覚を統一的に発揮することは、困難ではあるが、常にわれわれに課せられた課題なのである。」

このように述べた時に私は末川元総長の「未来を信じ、未来に生きる」ということばを想起します。また時の首相に「曲学阿世」と罵られても全面講和の信念を押し通した南原繁東大総長、「肥った豚になるよりもやせたソクラテスタレ」と言いきった矢内原忠雄東大総長、「ただ酒を呑むな」と諭した滝川幸辰京大総長らの品格ある発言が、それぞれの時期に多くの国民を感動させたことをあらためて思いおこさずにおれません。社会の大学に対する敬意と

信頼は、このような大学人たちの見識がもたらしたものとイえます。そこでは平和と民主主義の精神が、誰はばかることなく主張されていました。



### 理事会がもつ社会的責任

最近の立命館学園では、「平和と民主主義」が声高く語られることがすくなくなったように見えます。かつて「現代化、総合化、共同化」が、その後「国際化、情報化、開放化」のスローガンが強調されましたが、それらはいわば「平和と民主主義」の教学を実現するための政策でした。いつの間にか道具であった政策がひとり歩きし、理念が後景に退いたように見えます。4月の新聞記事で前理事長、総長への退任慰労金を従前の例を二倍とする新規規定に改めて、前理事長に対して慰労金1億2千万円が支出されたことを知りました。記事は4段にわたる大きなあつかいです。正直に言えばビックリしました。私は一般論として特に功労のあった役員に対して慰労金を増額すること自体には反対ではありません。しかし現に私学助成を受けながら、しかもかなり高額な学費を徴収している学園で、また聞くところによると教職員の一時金を年間で1ヶ月の削減が強行されたといわれます。理事会はこの問題で組合との話し合いも拒否したそうです。一般企業でも、役員への退任慰労金は一たん規程化してしまえばどんな状況でも支払いが義務化されるので、慎重にあつかうものだと聞いています。すこし業

績が後退したり、また景気変動しても、次第によっては株主総会が大もめになる恐れがあるからです。ところが今回の退任慰労金規程は、慣例による常任理事会での原案の討議もないまま、いきなり一般理事会に提案されて、突然に採決されたといえます。こうしたやり方がまかり通っていけば、将来の理事会や評議員会には、往々にして企業の株主総会に出現する「総会屋」のような存在が活動することにもなりかねないと思われまます。役員への退任慰労金が倍額になるのなら、一時金の1ヶ月削減との均衡をどう考えるべきなのか、このような当然の問題点が議論されなかったというのなら、一体、何のための理事会なのですか。これでは理事会を責任機関とする学園へ協力する気持ちをうしなう人が出現して当然です。

### 公費助成運動と官・産・学共同

立命館学園での私学への公費助成運動は、全国私学の中で文字通り先駆的な取り組みでした。教授会で公費助成委員が選出され、学内に国庫助成に関する委員会も組織されました。私はその委員会内の白書小委員会で「立命館教学白書」(1968)の作成にあたり、立命館の教学実態と問題解決のために公費助成がいかに必要か、力をこめて書いたおぼえがあります。いわゆる「紛争」の前年で、学内は同和教育問題で大荒れにゆれていました。教学部の再三にわたる要望にまけて冊子『大学教育と部落問題』の原案も執筆しました。下手をすると大学や執筆者も「糾弾」されかねない状況です。結局私はその年の研究を全部放棄せざるをえませんでした。このような中で公費助成運動に本気に取り組んだのです。真剣でした。のちに、たった一人で教学担当常務理事兼副学長をつとめた頃には、助成額が経常費の18パーセントをしめるようになり、衣笠移転直後の教学改善に大へん役立ったことを実感しました。教職員・

学生は公費助成請願のための署名簿をつくって社会にうつたえ、校友や校友会支部へも署名運動に参加してもらいました。国の財政政策や文教政策に大きな変化があったので、私の退職後の問題はまったく知りませんが、立命館学園からの郵便物に「私学に公費助成を！」と印刷されているのを見ては、一種の安堵感をいただきました。学園が教職員・校友から父母まで寄付金や学園債の募集に積極的な協力を得ることができたのは、みずからそれに先だって公費助成運動に取りくんできたという実績があったからだといえます。今回の退任慰労金問題のような不明朗な財政運営がつづくならば、学園内外の人たちによる公費助成署名、寄付、学債への協力は困難となっていくのではないのでしょうか。



なるほど現在も公費助成はありますが、それらには政府の主導する政策へ学園を誘導する傾向が顕著です。私は官・産・学共同の方針に絶対反対ではありません。たとえば環境破壊の進行を見聞すれば、科学・技術的な対策の必要は明らかですし、その施策のために学問が寄与しなければならぬ責任があると思います。官に協力してとくに科学・技術分野で重点的に推進する必要は是認されるべきです。詳論はさけますが、それにともなって社会・経済や教育・文化の面でも、そうした研究が必要でしょう。問題解決にあたって民間企業が役割を果たすことも当然であり、そこでも大学が寄与する必

要のあることは明白です。しかし忘れてはならないこと、大学は官からも産業界からも必ず一定の距離を保つ必要のあることです。あくまで大学は自らの見識の上に立って官と産への共に臨まねばなりません。大学が官と産によって鼻づらを引き回されるような結果になってはおしまいです。

### 大学間競争と拡張主義

いま世界には新自由主義という幽霊が自由に歩きまわっています。その中でも日本は、国際競争力を強め、また同盟国への軍事的協力を至上命令とするかのごとき政治勢力が主導力をにぎりつつあります。立命館大学では、少子化時代の到来を見こして、私学間競争を勝ち抜くための施策を優先させる傾向が生じているように見えます。国公立の大学が濫造された結果、定員割れの私大が続出し、財政破綻で閉鎖を余儀なくされるのではないかと噂される大学もすくなくありません。しかしわが立命館大学はすでに 107 年の歴史を閲（けみ）し、そのような危険からとっくに抜け出ていることは、入学志願者数を見るだけで明らかでしょう。学園当事者の長年にわたる努力に敬意を表するに吝かではありませんが、新自由主義の潮流に呑みこまれて、いたずらな大学間競争に陥り、ひたすら拡大路線に走ることは、自らを新たな危険にさらす結果にならないでしょうか。

### 歴史の教訓と西園寺公望

私は歴史学をやりましたから、どうしても歴史的な教訓に学ぶことをお許し下さい。いわゆる戦間期、第一次大戦から第二次大戦にいたる期間の世界史的経験によれば、規模が伸びきった経済や各種の組織は、やがてその反動として極端な縮小を余儀なくされます。1929 年の世界大恐慌の前夜までは、世界はまだ好況に浮かれていたのです。それが一転して日本では緊縮

財政、企業合理化の時代となり、極端な就職難、映画の「大学は出たけれど」の不景気となります。日本が中国大陸に本格的に侵略を始めた時、残念ながら戦争反対の気運が強くもり上がらなかった背景には、国民のかなりの部分の不景気脱却のための戦争を容認する空気があったからです。ナチス・ドイツが欧州大陸の覇権をねらったことにもほぼ同様の事情がありました。当時の侵略主義には今日の成長神話といたずらな競争力強化の思想に通ずるものが感じられます。年寄りの冷水といわれそうですが、私は心配でなりません。

私は本気で西園寺公望という人物の見識を尊敬しているのです。大恐慌、張作霖爆殺、柳条湖事件、テロ続発を背景とする右翼と軍部の政治的台頭、日独伊三国同盟、新体制運動、大政翼賛会、彼の死後一年の対米英宣戦布告につながる、以上のような一連の事件に全部反対しぬいた有力な政治家は西園寺だけでした。一時はヨーロッパ大陸を制覇して英軍をダンケルクから撤退させたヒトラーの作戦が成功し、日本の有力政治家や軍部、言論界まで「バスに乗りおくれるな」と浮かれ出した時です。ドイツ軍がフランスを占領したのにつけこんで日本は仏領インドシナに進駐しました。西園寺はあくまで冷静で、日本のドイツ追随に断固として反対し通しました。時流におもねらなかったところがえらいのです。

ちかごろ西園寺のレリーフが学内の何ヶ所かにかかげられていますが、それは彼が遺言で禁じたことなので、私は注意したのですが、無視されています。看板のようにかつぎ回るだけで、西園寺の言行に学ばないのは困りものです。

朱雀校地の理事長室には家塾開設の時に掲げた西園寺書の扁額「立命館」が掛けてあります。「立命」が「孟子」の尽心篇に出典することは御存知でしょう。実は「孟子」は王朝交代による革命を是認したので、多くの人から危険



思想として排斥されていたのです。「自ら反（かえり）みて縮（なお）くば千万人と雖も吾往かん」ということばも「孟子」（公孫丑篇）によって知られました。私は西園寺が孤立しながらも節をまげず、冷静に自説を押し通した姿に孟子が二重写しで見えるのです。

### 拡張と教学の充実

私は立命館のいわゆる拡張主義を全否定するものではありません。しかし大きくなればよいという子供っぽい私学間競争主義から抜け出る時期になったのではないのでしょうか。現在ある学部の教育・研究体制や教学施設をさらに充実させる方向にもっと力を入れるべきです。

私は今でも図書館や衣笠各所の書庫に一週間に一、二度は出入します。図書館の書庫につながるエレベーターには館員以外の使用を禁ずるはり紙があるので、急な階段を歩いて昇降します。それはいいのですが、特別閲覧者用の閲覧室がないので、書庫の中で立ったまま、いや時には地べたに座りこんで検索します。大部の全集や叢書のどこに必要な箇所があるか調べるためには、かなりの冊数を机上にもちこまないとならないのですが、それをするためには重い何冊もの書物をかかえて書庫の階段を二往復しないと、閲覧室を利用できません。階段の途中で腰をおろして一休みとなります。あちこちの大学図書館にいきましたが、特別閲覧室のないのは立命館だけでした。かつては人文科学研究所に資料に精通した教職員が配置されていましたが、今は資料について説明できる人がおらず、ただ研究会の掲示と資料の閲覧や貸し出しの手続きを担当する職員はいますが、事務室と書庫は別の建物です。あれでは資料の持ち出しや散逸を防ぐには心もとない体制です。『西園寺公望伝』の編纂事業が終わった時に、それに使用した資料一切を人文科学研究所へ返却しましたが、その重要な部分が未整理・未

登録のまま放置されています。中でも特に貴重な一冊だけは見かねて人文研と図書館に話をして、西園寺文庫に入れましたが、ほかの資料はほったらかしです。国会図書館等からコピーしてとってきた資料などにも、本当は非常に貴重なものもあるのですが、何しろ未登録のままですから、教員の中には人文研の所蔵を知らないで、国会図書館にまでいった人がいるのではないかと思います。つまり研究を補助すべき職員体制が不十分なため、折角ある資料が宝の持ち腐れとなっているのです。これは私の研究する分野だけの話ですが、同様の問題は他の分野にも多いのではないのでしょうか。学部数の拡大だけでなく、既存の教学条件の改善に、もっと力を入れるべきではないかというのが私の意見です。日ごろ感じていたことですが、他に意見を述べる機会が与えられていないので、老婆心までに申上げました。

### 学費問題と「勤労学生」の歴史

つぎにどうしてもふれざるをえないのは学費問題です。私学にとって学費問題は頭の痛い宿命的な問題といえましょう。勿論安いにこしたことはありません。然しいわゆる「安かろう、悪かろう」ではこまります。先入観で戦前の立命館は低学費で教職員も低賃金だったと思いこんでいる人がいますが、調べてみると一部の学費は他の大学とくらべて必ずしも低くはありません。ただ勤労学生のために二部学費は低く設定されていたようです。然し二部教学の質が一部よりも低かったわけではありません。故白川静先生や谷岡武雄元総長のようなすぐれた研究者が二部卒業生だったことが何よりの証拠です。また十年ほど前に高齢で存命しておられた戦前期の立命館大学教授の高瀬重雄先生（のち富山大学長、故人）をたずねて、『百年史編纂』の参考のために戦前の立命館についての話のうちがあったことがありました。高瀬先

生は戦争末期に京都の食料事情の悪化に閉口して帰郷し、高岡高商の教授に転じられた方ですが、その時に立命館で受けていた俸給が富山県知事よりも高いことが判明しておどろいたと言っておられました。中川総長は独裁者でしたが、教員の待遇には結構気を使っておられたようです。しかし教授会の権限は無いにひとしく、教員に相談もなく勝手にカリキュラムが変更され、登校したら自分の担当科目がなくなっており、憤然として辞表をたたきつけた法学部吉川大二郎教授のような方もありました。中川総長は設置者でもあったから、何でもできたのです。

私が立命に就職した1949年ごろには、学生数は一部よりも二部の方がはるかに多く、二部勤労学生の勉学意欲は大へん旺盛で、若い私もそれに刺激されて勉強するという有様でした。あたかも物すごい戦後インフレで学費も賃金もいくら上げたところで物価に追いつけず、学生も教職員もその中で腹をすかせながら学習と研究にはげんだのです。「もはや戦後ではない」といわれた57年ごろに一、二部の学生数が逆転し、高度成長期に入ると勤労者が夜間に大学で学ぶことがしだいに困難となります。二部学生の中の勤労学生の比率が低下して、二部まわし、二部まわりとよんだ、一部入試不合格者が二部学生にしめる比重が高まりました。それでも立命館は勤労学生への配慮があって、いわゆる相対的低学費の方針を堅持したのですが、高度成長の進展にともない、教学方針の全面的な見直しに取り組むこととなります。現代化、総合化、共同化の方針は、裏面からいえば小集団教育の全面的実施でした。世界的、全国的な「紛争」の発生も実施を加速します。そのために広小路をすてて衣笠一拠点化へ進むのは必然だったといえます。衣笠全面移転が完成した頃には国際化、情報化、開放化という新たな課題に直面し、その実施のためには巨額の原資

を必要としました。低学費方針は行きづまり、また学内外からの寄付を積極的に募集するというそれまでに経験のなかった方針まで実行されました。二部は結局維持できなくなり、学費も高額とならざるをえなくなったわけです。高学費のために学生がアルバイトに精を出し、今度は「高かろう！悪かろう！」にならないか、懸念されます。

### 学園関係者が一体となって教学に

朱雀校地ができました。理事長室はかつて陳情のために入ったことのある旧文部大臣室よりはるかに立派です。立派なことは結構、よくここまでやったなという学園当事者の努力へ感謝の念さえいただきます。しかし他方で、退任慰労金の倍額化や教職員一時金の削減などという施策を併せ考えると、全体として果して均衡のとれた学園政策といえるのだろうかとの疑問を禁じえません。

こうした問題について問題解決のために動くのは、本来、現職の教職員であるべきだと思います。しかし聞くとところによると、一時金問題でも、理事会は教職員組合との協議を拒否しつつ、府労働委員会のあっせん案にも応じないという話です。これでは学園関係者が一体となって教学にあたってきた学園の歴史から何の教訓もくみとらない姿勢というべきでしょう。私は教職員組合の書記長を三回つとめ、また当時の二部協委員長、学部長、教学担当常務理事兼副学長として七年間も理事会に連なりました。つまり運動と学園の両方で相応の役割を果たしてきたわけです。その経験と道理から、民主主義はまず話し合いからはじまるというのが平凡な結論です。学園でトップダウン方式はもっともふさわしくないと信じます。

### 自由な討論が民主主義を発展させる

最近ある人から聞いた話です。憲法九条をま

もるための署名簿をもってかなり多数の立命(衣笠)学生と接触したところ、全部の学生が「判らない」と答えたというのです。判らないなら質問すればいいのに、それもしない。九条をまもるのに反対ということであれば、反論と対話が成立しますが、それすらなかった。九条をまもることに賛成というのでもない。正直のところ私は衝撃を受けました。私が多年にわたりそこで働き苦勞もしてきた立命館学園がこんな大学生をつくり出したのだろうか。勿論これはある人のかかわった一例にすぎず、断固として九条をまもる気概にもえた学生諸君の存在を私も知っています。然し他方でこのように何でも価値判断から逃避する学生をつくり上げてしまったことも否定できない事実なのです。そういう学生は現代のビジネス社会でのト

ップダウンにひたすら服従して、ささやかな個人の幸福をきずくことを目指すサラリーマンになっていくのではないのでしょうか。その事実には、選挙当日に行楽に出かけて棄権する多くの非政治的市民の存在を思わざるをえません。歴史に徴すれば、それはファシズムの温床だったはずです。

いささか過激な私論にわたりましたが、自由な討論が民主主義を発展させるという信念にもとづいて、あえて「問題提起」させて頂きました。「UNITAS」による学園の広報はありますが、私たちに発言の場はありませんので、この場をお借りして、皆様のご意見を伺う次第です。

## 問題提起2

### 「変質」と「抑圧委譲」 —学園の現状の社会学的分析—

佐々木 嬉代三(元副総長)

#### はじめに—全構成員自治の優位性

ただいま、岩井先生は広い歴史的視点から立命館の現状を捉えられましたが、私は立命館の現状を社会学的に分析したいと考えております。あらかじめ岩井先生は30分、私と稲葉先生は15分と時間が割り振られておりますので、この時間設定を守るべくコンパクトにお話させていただこうと考えております。

さて、私は1971年に立命に参りまして、34年間勤務させていただきました。簡単に振り返りますと、70年代は職場と組合の仕事、80年代は調査室を中心とする全学の仕事、90年代後半からは常務理事や副総長の役についておりました。そうした経験から言えるのですが、70年代の立命では政策課題の決定に教職員組合が主

導的な役割を果たしておりました。私は77年に書記長を務めました。一時金を減らして本俸に組み込むという「一時金の本俸化」も、課長や事務長を補佐する「補佐制度の導入」も、組合が打ち出し、理事会が追認した政策でした。けれども、80年代になると、学生たちのいうWスライド制の学費改定方式の下で、財政的裏づけをもった政策遂行が可能になり、調査室が設置され国際センターが設置され、政策のイニシアティブが次第に理事会側に移るようになりました。そして90年代になると、いわゆる大学設置基準の大綱化の下で、各大学がこぞって改革に乗り出し、その中でも立命館は改革の先頭を走る大学として注目されるようになりました。この場合、教職員組合や学生自治会は理事

会の打ち出した政策を現場の目から批判的に吟味し、制度的枠組みに魂を入れる役割を果たしていたと思います。それが全構成員自治の優位性であり、他の大学が真似のできない立命館方式の独自性でした。



だが、この優位性や独自性が急速に崩れつつあるという実感があります。理事会が組合や自治会と話し合うのを嫌がるようになった、教授会の意見を聞くのさえ嫌がるようになった、という事態が進行しつつあるように見えるのです。

私が副総長をやったのは2003年度までで、この年度に4年に1度の学費見直しを含む全学協議会をやり、学生を含む起草委員会を組織して確認文書をきちんと結んでいますから、この時までは理事会が全学協等を敬遠し確認文書の作成を忌避するがごとき、独断的な姿勢に立つことは比較的薄かったと思っています。もっとも、2000年の創立100周年を兼ねたAPU開学式典で、巨大な日章旗が演壇の中央奥に高々と掲げられ、それを総長も知らぬまま式典が進行するという事件がありました。組合からも教授会からも強く批判され、しかも国際外交儀礼上も自国の旗を中央に高々と掲げるのは極めて不遜な行為だと教えられ、当時の常任理事会は式典の中味の検討を理事長個人に委ね、自らの手で集团的に吟味することがなかった点を反省し、常任理事会の責任の問題を強く自覚しつつ、あってはならぬ今後の戒めとしたものでした。し

かるに、話はやや飛びますが、本年3月に理事長・総長への退任慰労金増決定で、常任理事会の議論をすっ飛ばして一般理事会が決定するということを、再びあえてやっている。しかもその後、ユニタスにおいて、かつて差し戻された写真、巨大な日章旗を背後に理事長が演説しているかつての写真を、あえて掲載するという愚を犯している。まさに確信犯的であるわけです。何故か、どうしてこのような事態に立ち至ったのか。それを究明する必要があるのです。

### 「変質」の要因

一番分かりやすい説明は、学園のトップに立つ者が、彼らの長所でもある押しの強さやあくの強さを、誰はばかることなく発揮し始め、それを抑える人間がいなくなったので、結果的に極めて独断的な政策遂行を許すようになった、というものです。ただし、これには背景的事情があるように思います。

第1に、APUの開設、小中高の増設、新学部の設置等々、次々と新規に打ち出される政策課題に関しては、学部教授会や教職員組合の守備範囲を越えた、その外にある政策課題だということで、現場での議論が軽視されやすくなっていったということがあるように思いますし、

第2に、国公立ではない私学の独自性の主張が、教学を支える財政という従来の見解の軽視につながり、教育と研究の上に経営を置き、経営者の権限強化を当然とする風潮を醸成したと思われまし、

第3に、私学間競争に勝ち抜き、立命を早稲田や慶応に並ぶ天下の立命に育てたいという野望が、この野望の達成を遅らせるような批判を封じ込めるという方向に作用するとともに、野望の達成度を示す数値目標へのこだわりが、地味な教学改革よりもCOEやGPの数を競うという方向を選ばせたように思われます。

このようなことどもが重なり合って、学園指導

部の独断的態度が増長され、しかもその増長の範囲が新規の政策課題にとどまらず、学園運営の全般に及び出して、組合や自治会や教授会さえをも不要とするような乱暴な議論を生むに至ったのだらうと推察しております。

### 「抑圧委譲」の貫徹

だから、今や立命館の民主主義は死の危機に直面しているのではないかと思います。産業社会学部の中堅、若手教員が3名、来春関西学院大学や明治大学に移ります。年俸が100万円以上安いということだけではなく、立命で働くことに誇りがもてなくなっているのです。しかも、職員層を見ていると、トップがおかしくなると、それに次ぐ者がトップを守るためにおかしくなり、またその次の者が上の指示・命令に背けないということでおかしげなことをやるという具合に、丸山真男のいう抑圧委譲の原則がいびつな形で学園内部を貫き始めたように感じます。いや、職員層ばかりではなく、あえて名指せば、学生部長や学生担当常務理事の学生に対する対応を見ていると、抑圧委譲の原則が教員層をも巻き込んで進行しているのではないかと疑われるのです。誠に情けない事態の進行

でありますが、こうした事態の進行を食い止めるために、私たちは何をなすべきなのでしょう。

### なすべきこと

なすべきことは単純です、なにも難しいことではありません。私たち一人ひとりが現在の理事会の学園運営の非民主性を声高らかに非難することが必要なのです。正々堂々と、社会的道理に照らして自らの考えを伝えてゆく、その勇気と気概を持つことの他に、私たちが抑圧委譲の原則を食い止めて、まっとうに生きる道はないといえるのかもしれませんが。争いを避けたいという気持ちは誰にでもあり、人事と財務の権限を振り回されると沈黙を余儀なくされるという悔しさもまた、多くの人々の胸のうちにあるとは思いますが、それでもなお否というべきときに否という勇気をもてば、それだけで状況が変化し始めるというもの、確かなことなのです。私たち元教職員は、非力ですが、理性と道理を尽くして、現役の教職員と学生を励まし続けるつもりです。ご静聴有難う御座いました。

## 問題提起3

### 立命館が築き上げた貴重な財産、誰が台無しにしようとしているのか

稲葉 和夫(立命館大学教職員組合2007年度執行委員長)

#### はじめに

ただ今芦田先生よりご紹介をいただきました教職員組合執行委員長の稲葉でございます。

私が赴任した1986年その年に、組合の学習会等で最初にご発言いただいた岩井忠熊先生より立命館大学の組合運動と民主主義の取り組

みについて本日のようなお話を聞かしていただいたことを改めて思い起こします。立命館大学に着任をしたはじめの教職員研修会において当時教学部長をされていた芦田先生より全学構成員自治の意義について熱っぽく語っていただきました。芦田先生、そして当時の谷岡

総長は、新任の教職員を温かく迎え入れていただいたことを今でも記憶しています。前理事長、現理事長が新教職員に対して「やる気に無い人はいつでも出て行って構わない。替わりはいくらでもいるのだから」と発言していると聞き本当に信じられない気がします。佐々木先生とは、1995年私が委員長をしていた時は学生担当常務理事をされ、2000年の副委員長のときは副総長といつも反対側のテーブルで向かい合っていたのですが、本日はやっとな敵対的な関係でない形でお話ができるのを大変嬉しく思っています。このような形での会合開催を3カ月前までは想像もつきませんでした。先輩の方々が本当に現在の立命館を思っていたら、何とかしなければならぬと立ち上がっていただいたことに対して、教職員を代表いたしまして心から感謝を申し上げる次第です。

### 全学構成員自治崩壊の危機

さて、本日私に与えられた課題は、この間の立命館学園の変わりようについて発言することですが、時間の制約もあり個々の生々しい状況については、この後のフロアーからの発言にゆだねることにし、大きくは全構成員自治に関わる問題、学園創造を保障するための教育研究労働条件の問題についてお話をさせていただきます。

最初の全構成員自治の問題は、総長公選制、業務協議会、そして全学協議会があげられると思います。総長選挙規定は理事会提案の改悪案が昨年度教学機関、組合で猛反対をうけたにもかかわらず、教職員・学生・院生の参加を著しく制限する案が通り、総長選挙が行われ現川口総長が当選したものの、事実上の不信任としての26票の白票が出る結果となりました。川口総長は、就任早々教職員の対話を重視し、信頼回復をはかりたいと述べていましたけれど、最近の評議員会ではこれまでの労使関係を崩すよ

うな、総長としてふさわしくない発言をしたと聞いています。川口総長の発言内容に関してフロアーの方から御指摘いただければと思います。

### 学園トップ層の意思決定と業務協議会不開催

今年の春闘取り組みにあたって、私達教職員組合が最も重視したのは、一昨年来の一時金カットをはじめとする理事会側の意思決定のあり方です。教育研究労働条件を要求する前提として、学園トップの意思決定自体を変えることなしには、何も事が始まらないと考え、大会の議決書ではこれまでの学園トップの意思決定のあり方を批判しました。それに対して、理事会側はこれまでの学園の到達点を否定するものだと議決書の表現の揚げ足を取り基本的評価の変更を迫りました。また、学内の問題を外部に持ち出す一時金訴訟を支援するような組合とは、話し合いはできないなどと言いがかりをつけ、結局業務協議会の開催を拒否してきました。6月8日の総長懇談会、拡大事務折衝などを経ましたが、理事会側は当初から学園のあり様についてまで議論が及ぶのを避けたいがため、業務協議会をはじめから開くつもりはなかったようです。



### 学生・院生・父母・教職員の批判に

#### まともに答えようとしない退任慰労金問題

学園トップの意思決定に触れられたくない最も象徴的な出来事は、3月23日の一般理事会

で決定された退任慰労金倍増でしょう。その日の夕方、現相談役の感謝の集いをウエスティン・都ホテルで開くにあたって突然出された提案であって、学部長理事がおめでたい席の前で異を唱えること自体が極めて困難であったことは容易に想像できます。一時金カットをしておきながら決定された二人合計1億6千万円にのぼる退任慰労金は、学費とのかかわりで学生・父母にも説明のつかないもので、未だに納得のいく説明をしていません。このような決定を知った多くの学生父母からの怒りの声が教職員組合に寄せられています。今回の決定は、単にけしからんという問題にとどまらず、法人側が退職金として取り扱っている処理の仕方、公費助成との関わりなど重大な問題を残しており、税務署も現在多大な関心を示し調査を進めているところです。この点については、必要であればフロアから詳しく述べてもらいます。

### **全学協議会開催と退任慰労金問題**

全学協議会については、前期の春闘をめぐる理事会側との様々なやり取りもあって組合として早い取り組みをすることができなかったことは反省すべき点です。それ以上に大学側の反応は全学協自体を開きたくないと思えるような非常に鈍いものでした。それを象徴する一つの出来事は、学生自治会・院生と朱雀での退任慰労金反対の共同行動(7月27日)を私達教職員組合が取り組むに当たって取った学生部長、次長の学友会責任者に対する対応です。彼らは、学友会責任者を事前に呼び出し、3時間にわたって朱雀行動をやめさせるように圧力をかけ、そうしなければ全学協が開催できないかのような脅迫まがいのことも行いました。学生の成長を支援すべき学生部の責任者が、学生の自主的行動を妨害するなどあってはならないことを平気で行うような状況が大学で横行してい

ます。このことの詳細については本日出席されている学生諸君からお話をいただければと願っています。特に、傑作なのは朱雀行動当日の学生部長、次長の行動です。彼らは、産社、文などの委員長が集会に参加するのを待ち受けて呼び止めました。彼らが集会に参加すると全学協議会の開催が危ぶまれるかのような脅かしをかけてきました。また、学生諸君が学費とのかかわりで退任慰労金倍増の反対決議をしてなぜいけないのかとといただすと、学生部長は「理事会にも自治がある」という発言をし、あたかも退任慰労金倍増批判が理事会の自治権を侵害するといわんばかりです。私もその場に居合わせていましたのでこの発言はよく記憶しています。この学生部長の独創的な発想と見識ある言動について後日経済学部長に話をしたら、流石に学部長も首を傾げていました。

### **学園トップ層による学友会攻撃**

全学協を開催するにあたって、大学側は議題の設定の仕方、開催形態、議題の進行方法など様々な点について事細かに学友会に対して注文をつけ、受入れなければ全学協開催ができないかのような圧力もかけてきました。全学協議会の開催後、従来は大学側が確認文書の起草を呼びかけるのが通例でしたが、未だに何のアクションも起こしていないどころか、学友会の対応にクレームをつけ十分な謝罪をしなければ今後の協議に応じられないという前代未聞のことが生じています。最近、学生部長名で学友会の会計処理に外部監査をするという通知を学友会に行いました。学友会の出金処理が適切に行われているのかというのが表向きの理由でしょうが、学友会の出金処理は学生部業務として行い、その管理責任者は学生部長であるのに外部監査をしなければならないとしたら、学生部長自体の責任が問われるものです。このような動きとは別に、学友会に対しては、学友会

費代理徴収の問題を出しており、来年4月から代理徴収廃止する方向を理事会側は持っているという話も聞きます。出金処理のあらを見つけ出し、代理徴収をやめる理由とし、学友会つぶしをしようとするのでしょうか？全学協もこれで最後にしたいという学園トップの魂胆があからさまになっているように思えます。

## 立命館学園正常化に向けての

### 私達教職員の責務

以上のような学園民主主義に関わる重大な問題は、常任理事会でも生じていると聞きます。学部長理事が教授会の総意として批判的意見を述べると一部の学園トップ層から集中的に罵声を浴びせられることとか、あるいは職員の方が学園トップ層に対して批判的態度でいると「配置転換」などで報復される雰囲気があるなど、後に具体的な事例をフロアーから御指摘いただければ幸いです。

このように、戦後の立命館大学の到達点、財産とも言えるこれらの全構成員自治の全てを葬り去ろうとしていることは私には自殺行為としか思えません。

残念ながら、第二の教育研究労働条件についてはお話をする時間がなくなりました。教学組織の新たな提案をめぐる問題、一時金をはじめとする賃金問題、新就業規則の問題、職員層の超過勤務をめぐる様々な問題など多くのことを話題にしたいのですが、この後フロアーから発言をいただければと思います。

現在の立命館は学園内の問題を内部で処理できるような状態ではなくなっています。学園のトップ層が学生・院生・教職員の声と意見を聞く耳を持たなくなっているからです。内部の恥を学外に持ち出すのはいかなものかという言う意見を良く聞きます。しかし、民間企業での様々な不祥事は、内部での自浄作用が

なくなっていることから生じていることは明らかです。退任慰労金倍増などの明らかにおかしな決定は、学費を払っている学生・院生・父母に納得のいく説明がなされるのは当然であるだけでなく、公益法人として国家から様々な形で助成を受けていることから国民に対しても説明できるものでなければなりません。きちんとした説明を理事会側がしようとしなければ、学園の垣根を越え、社会的国民的課題として、学園トップの意思決定のあり方をただし、国民にしっかりと説明することが私達教職員の責務であると考えています。

これまでは、組合の運動はどちらかという内向き傾向がありましたが、現在起こっていることは立命館だけの問題ではなく程度の差、時期的ずれはあっても全国の大学にも生じています。私立大学の理事者が結託し、その後ろには様々な誘導策をとっている政府・文部科学省の動きが見え隠れします。私達の運動は、内部の変化に振り回されるのではなく、しっかりと大学を取り巻く環境を把握し、今後の大学のありようはどのようにあるべきかを見据えるような議論をすることが一層重要になってきています。

このような状況の下、組合活動も幾つかの困難な局面遭遇しています。昨日開催予定であった組合の大会が後継者を確定することができず、延期せざるを得なくなったこともその一つです。しかしながら、このような困難な状況は、現在のような学園トップ層の意思決定に起因している側面もあり、学園正常化のためにも克服しなければならぬと考えています。本日ご出席の退職者の方々、そして学生諸君・院生諸君と手を携えて立命館の正常化を図る努力することをお約束しまして私の発言をしたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。



## 芦田 文夫 (コーディネーター)

続いて、フロアーからの自由な発言をお願いしていきます。ただ、今日は是非とも発言したいという意向が事前にかなり寄せられていて、なにか気迫が漲っているのを感じ、みなさんに十分な時間と人数が確保できなくなるのではないかと心配しております。冒頭で申しましたように、今日が論議のスタートで、これからこのような活発な論議が必要なんだということをみんなで確認し合うということが第1回のフォーラムの趣旨ですから、発言できなかった方、十分内容が論じられなかったものについては、今後の会の『ニュース』や続くフォーラムに廻していただくことで、ご容赦下さい。また、元教職員と現役、教員と職員、文社系と理工系、高中校、学生・院生、など各層のバランスにもお互いに配慮して、できるだけ簡潔に諸論点が浮かび上がるようなかたちで発言をお願いします。

## 第1回フォーラムのまとめにあたって (コーディネーター 芦田 文夫)

時間が十分とれないだろうと思って、事前に寄せられたものについてはレジユメ的に文章化しておきましたので、それに譲ります。

### [1] ニュースでの試論的提起

『ニュース1号』(注1)で試論的に提起しておいた論点で、これらは私が昨年まで「立命館百年史」編纂に関わっていて、多くの現・元教職員が参加し論議を重ねてきたなかで出されていた報告・資料にもとづいて、私の責任でまとめたものです。

(1) 学園内には、内外の情勢をめぐる認識に大きな「断層」があるにも関わらず、真摯な全学的論議が忌避され、指導部の「トップダウン的独走」が続いているのではないか。

(2) 「学園創造」の新しい段階における学園政策化の基本的スタンスにおいて、本来の大学としてのあるいは立命館の「教学理念」からする主体的立場が弱くなり、時流に流されていく状況が生まれているのではないか。

(3) 教学の現場との真摯な往復論議が弱くなる

なかで、教学の主体をになう学生や教職員、教授会の実態との断層が目立ち始め、その意欲と参加が著しく後退してきているのではないか。

(4) この断層を埋め、「教学的内実化」の課題にとりくみ、どう「持続的な教学・研究力」の醸成を図っていくかを全学的に論議すべき時ではないか。

(5) 「全構成員自治」を縮減していく方向ではなく、学生実態の変容にそくした自主的・自治的活動の新たな構築のし方を全学的に論議していくべきではないか。



## [2]呼びかけに応える意見

今回の「考える会」への呼びかけに応じて寄せられた、元教職員および現教職員の意見で、比較的多くに共通するものです。

(1)「考える会(元教職員)」の立場について、あくまで現役の教職員や学生諸君が主体であることをふまえながら、しかし外部や他の大学人からも疑問や批判がだされ「自浄能力」が求められるようになっていくとき、いわば内と外との接点にいるものとして「共に考えていく」社会的責任がある。現役の教職員からは、期待する声が圧倒的であった。

(2)「トップダウン方式」の下で、教学の現場では不信と閉塞感がきわめて強くなっている。とくに目立ったのは、「新しくきた人」の多くが、「立命館の民主主義」の建前と実際の乖離に強い疑問を投げかけ、拒否反応的なものすら表明されている。しかし、大学にとっての「本来の民主主義」の意義が否定されているわけではない。教学と労働(仕事)の実態をリアルにふまえ、実際の研究・教育・労働の場から「立命館の民主主義」を内実をもって再構築していく課題があるのではないかと。

(3)なぜ「立命館の民主主義」が変容してきたのか、を問う意見が多かった。「政・官・財」の政策の「先取り」——外部資金の取り込み——新たな領域の「外延的拡大」が追求されていく反面で、現存の教学の現場、教授会・協職員組合・学生自治組織の軽視が強くなっていったのではないかと。いま一度、その変容の歴史的な諸段階(1980年代以降の「学園創造」の新たな段階の意味、90年代後半以降の「大学審」路線の急展開と「生き残り競争」、そしてAPU「大型公私協力」、…)、および、全国的な「大学改革」の波動のなかでの位置づけ(「私立学校

法」の改変、「国立大学法人化」のなかでの「大学の企業化」と「トップダウン方式」)を掘りさげて分析していく必要がある。

(4)いま学園の転換点にあつて、全構成員自治の伝統を活かし、さまざまな意見を自由に交流しあい、新たな段階における「立命館の民主主義」のあり方を前向きに創造的に論議していかねばならない。これまでの「立命館の民主主義」についてもその積極面と消極面を整理し、新たな「民主的ガバナンス」のあり方と構造、そのさいの教学の現場・教授会、学生と理事会との相互関係を探求していく必要がある。

(5)最後に、「言いたくても言えない」圧倒的多数の学園関係者の「声」を、どのように引き出し「共に考えていく」か。さしあたって、「言いたいことが言える」交流の場を目指していこう。

- (6)その他、指摘されていた具体的な問題——
- ①本来の「教職協同」が崩れて、「職員管理大学」に変質しつつあるのではないかと
  - ②COE型プロジェクト研究だけが突出させられていくことがもつ問題
  - ③新たな段階での、教学と財政の「統一」とは
  - ④「多様な雇用形態」の教員・職員と「全構成員自治」



### 【3】フォーラムでの発言等

フォーラムでは10数人の発言があり、その後開催された懇親会での発言を含めた論点です。

(1) 現役の学生と教職員から、「トップダウンの専断的やりかた」が学生と教職員の実態と声を無視した形で進み、いかに「断層」が広がっているかがリアルに発言された。

(2) 「学園政策化」の「変質」の歴史的経緯が、いろんな面から具体的に述べられた。とくに、APUの創設過程における外部との関係、内部の教授会はじめ諸機関の軽視・無視が一つの決定的契機となっていたのではないかと（象徴的出来事としての「日の丸」掲揚問題）。これら経緯の全国的な政治的なバックを指摘する意見もだされていた。

(3) 専断的やり方が学園内の「ガバナンスの構造」にどのような歪をもたらしているか、が多面的に出されていた。各構成パートの異なった意見を出し合って協議をおこない合意をみつけだしていくというのが「全学協議会制」「全構成員自治」の趣旨であるのに、スタートのところで「意見が異なるから」という理由で協議の場そのものが拒否され、全学協議会や業務協議会の忌避が続いている。教授会や教員会議のところでは、いくら議論をしても「聞き置く」だけで返ってくるものがない状況が続くと、現場では閉塞感と無気力が次第に強くなっていく。学園機関の側も、ごく少数のトップ以外の諸レベルでの集団的な民主的な論議がほとんど無くなってきている。上の指示・命令だけに無条件で服するという官僚主義化が進んでいるのではないかと。

(4) 内外の新たな社会的諸条件のもとで、立命

館における民主主義の新たなあり方を全学的に議論して、その中身を創造していく営みが今後を決めていくであろう。そのことによって、社会的責任を果たしていかなければならない。

(5) 「大学の企業化」が問題にされているが、一般企業では「トップの誤り」を問う、あるいは責任をとらせるシステムがある。大学では、「トップの誤り」はないという「ガバナンスの構造」が前提になっているのではないかと。

(6) 今後のあり方に関わって、従来の理事会・大学機関と運動体（教職員組合や学生自治会）とのある種の「一体化」を反省的に総括し、これからは自立した立場での民主主義・大学自治の運動化をおこなっていかなければならないであろう。

#### （注1）

『ニュース1号』に掲載された私の意見―「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」への期待―（07年10月）をはじめ、これまで発行している『ニュース』は、ホームページが立ち上がり次第、順次掲載する予定です。

もし、これまでの『ニュース』を読みたい方は、事務局まで申し込んで下さい。



## 【フォーラム参加者の感想】

### OS.T(学生)

私は、立命館に6ヶ月ほどしか関わりがありませんが、それでも立命の民主主義が危険な状態であると理解するのは、07年の全学協を見ただけでも難しいことではありません。しかし、学生の関心はあまりよろしくないと思います。学費についての世論は形成されていますが、それ以上深いところまでは、岩井氏が述べたように、無関心が広まり、権力と闘うという意識が欠落している「おめでたい人たち」は各団体に勢力を拡大しております。今回のフォーラムでは、学生が情報を手に入れにくい教職員と理事会の関係を知ることができ、とても良いものでしたが、現在の学生を見ていると、このフォーラムが知識のある人同士での話し合いというように思えました。立命館で最大の勢力である学生に「おめでたい人たち」が増えてしまったことも、この現状の原因であると思います。今回の参加者が、教職員の方々ばかりでしたので、学生の実態についてはあまり発言がありませんでしたが、今後、その点を考えていきたいと思っています。

### ○匿名希望(学生)

私は、06年度から学友会の活動に取り組んできました。当時すでに“立命は民主主義ではなくなっている”という噂を聞いていました。それを私の中で決定づけたのは、06年度に行われた総長選任選挙でした。学生、院生、教職員の参加人数が減ったのもそうですが、私たち学園を支えていく3パートが選任・決定方法に対して反対をしている中で強行され、しかも総長選任選挙当日、「全構成員自治のもとでこの日が迎えられた」と理事会がいったことでした。悪びれもなく、私たちの目の前で、あたかも本当に全構成パートが納得しているかのように

言われたとき、「立命館大学は『全構成員自治』という名だけを利用していくんだな、こんな大学になってしまったんだな」と実感し、悔しさと絶望を理事会に対して抱いたのを覚えています。

そして今、学友会という組織されたパートの声を聞くのではなく、総長との昼食会のように、大学が学生を直接集めるシステムが、動いているように感じます。全構成員自治の名だけを残すために、対等に話し合える学友会を潰し、学生一人ひとりから都合のいい意見を聞くだけのものにしようとしているのかと思うと、悲しくなってしまう。

今日は理事会や大学に対してどのような意見を皆さんが持っておられるか、お聞きしたくて参加しました。参加して勇気づけられた思いです。ありがとうございました。



### ○匿名希望(学生)

多くの人々が参加していて、あらためてこれほどの人々が危惧するような状況に立命館があるのだと実感しました。問題提起やフロアからの発言では、学生のみでなく教職員にとっても辛い環境がつくられていることがわかり、現実の厳しさに驚きました。教職員も学生も立命館が好きであることには変わりないと思うので、本気になって連帯していきたいと思っています。

「平和と民主主義」という“主義”を学園の教学理念とすることは、とても難しいことではあると思います。これまで学友会の諸先輩方や

教職員の方々が考え守ってきた理念を私も守っていきたいです。結成文の最後、感動しました。

### ○匿名希望(現職員)

教員と職員の意識のレベルのすりあわせがよりよい形で実現できるベースが十分に出来上がったと思う。従来の立命館の良さである「大学として果たすべき使命を認識して結集」できる場が、一時金、ガバナンス問題が根底にあることはさておき、より高いレベルで設定できたことを実感している。

今日はプレエントランスデーであったので、若手職員が少なかったが、今後も公式・非公式を問わず「寄り集まる」活動を継続すべきであると思う。個人的には中堅・ベテラン・若手を問わず立命館のより良い形を取り戻すために、結集しやすくなるような日常的活動に、組合以外のところでも企画を計画していきます。



### ○永原 誠(元教員)

「過去を知らないものは現在を知らない」というヴァイツゼッガーの周知のことばは、ひとつの国家にとっての真理であるだけでなく、大学を含むすべての組織にも当てはまるものだと思う。

立命館はいま、誰が見ても深刻な危機に立たされている。そういう時にこそヴァイツゼッガーの言い分が想起されてよい。

折しも館史編纂の大事業が長期間を費やして営まれてきているわけだが、立命を現在担って

いる教職員の大半は、おそらく既刊の2巻も多数の紀要も読んでいないのではあるまいか。

立命の過去を元教職員が自分の体験から語り、現教員有志に聞いていただく企画を本会として立ててはどうだろうか。過去を知ることが現在の危機の深さを知り、明るい未来をつくる力を育てるいちばん確かな方策であろうと思っている。

### ○匿名希望(現職員)

12月22日はとても懐かしい先生方、諸先輩のお姿を拝見し、それだけでも感動でした。年末のお忙しいなか、学園を心配して遠方からもわざわざお集まりいただいたことに、現役職員は勇気付けられました。

みなさんのお話を伺うなかで、4年に一度の全学協や毎年の業務協議会が民主立命のバックボーンであったと改めて思います。今、学園のリーダーは「学生のための改革」と言いながら、学生の声に耳を傾けず、彼らの想いを踏みにじっています。話し合い、ともに考えることは民主主義の基本ではないでしょうか。これでは学んだことが生き方につながりません。それを学生は怒っているのです。

私たちは誰もが生きいきと働き続けることができるように、教職員組合で活動してきました。よりよき職場作り、働き甲斐のある職場造りの原点は学生の成長です。いま、そのことが危ぶまれるような事態があります。先生方がお示しなされたように、おかしいことはおかしいと言う勇気を持って、仕事をしたいと思います。全国の隅々に広がっている「平和と民主主義」の立命館の名に恥じないように、これまでの先輩方の努力を思いながら、私たちも団結していきます。ありがとうございました。

### ○奥村功(元教員)

異例の集まりがこれほど多くの参加者を得

たことに感慨を覚えます。局外者であっても発言すべき時だという判断がこれだけ広がっていることに、理事会は留意してほしいものです。

「立命館民主主義の変質」ということばが会合でなんども出ましたが、ここ数年の変化は際だつものの、90年代からすでに、教授会の討議を無視し理事会が独走する、いわば教職員の無権利状況があったと思います。

権力の集中と固定は、どの機関であっても弊害を生むという単純な真実を肝に銘ずるべきでしょう。プーチンが大統領のあとに首相をやる喜劇をこれでは笑えないと思います。現状をあらためるためには、ともかくあらゆる部署から批判の声を出すことが必要でしょう。そういう声をどんどんあげることが同じ思いの人を勇気づけるし、それが理事会の専横をとどめる唯一の方法だと思います。

## 【連帯のあいさつ】

### 報告集の発行にあたって

佐藤 春吉（立命館大学教職員組合2008年度執行委員長）

立命館の民主主義を考える会に結集し、また立命館の民主主義の現状に憂いをい多く多くの諸先輩の皆様に、教職員組合を代表してご挨拶申し上げます。

私たち、教職員組合は、05年度の一時金1ヶ月分の一方的なカットの強行以来、立命館学園の一部指導者たちがとってきた一連の行動が、立命館学園が育ててきた教育の基本理念と精神を傷つけていくことにたいして非常な危機感をもっています。この間の立命館の仕事内容は複雑になりまたその仕事量も増え益々厳しくなっています。そのような厳しい日々の働きを継続しながら、私たちは現在進行している学園のガバナンスの非民主的なやり方を許してはならないと必死に闘い、声をあげています。

私たち現役の教職員は、なんとか立命館を民主的な大学に立ち戻らせたいと頑張っています。多くの諸先輩の方々が、今日の事態を憂い心配して「考える会」を立ち上げ活動を始めていただいたことは、現職の教職員にはとても大きな励ましとなります。皆様のご奮闘に心から感謝申し上げます。このようなことが可能となったことは、立命館の平和と民主主義の理念が、今なお立派に精神として生きている証だと思います。私たちは今後もねばり強く運動を展開してゆく覚悟です。どうか、お互いに協力し合いながら、立命館をよくするためにがんばりましょう。

ついでですが、こんどの集まりについて新聞社の取材がなかったのは残念でした。

## ○安藤 哲生(元教員)

一時金カットと退任慰労金倍増は、共に、立命館学園での教職員の果たしてきた仕事に対する正しい認識の欠如からきている。学園経営陣の倫理観の欠如によると思います。

教育組織である立命館学園の経営が、株式会社と同様のトップダウン（縦社会）であってはならない。特に責任をとる仕組みのないトップダウン組織は必ず腐敗する。現状はきわめて異常だと思います。

「考える会（元教職員）」は集会を続けることによって、現職の方々を応援することが重要だと思います。

### 【編集後記】

過去 - 現在 - 未来へと連なる歴史の営みと、教員 - 学生 - 職員のトライアングル、この二つが縊糸のように絡み合い、強い弦となって立命館の発展を支えてきた。それが一部の人によって恣意的な非民主的運営の学園に変質させられつつある。フォーラムでの問題提起者やフロアからの発言は、その危機の認識と「何とかしなければいけない」という気持ちに彩られていた。

この日の会場には、主催者の予想を越えて、116名もの人で溢れた。朝からの雨模様、大学の行事などが重なった、集にくい条件にもかかわらず、これだけの人が参加したのは、それだけ学園への想いが強いということを反映している。それだけではない。退職者の数（41名）を上回って、現任教職員（56名）や学生・院生（8名）、その他市民（11名）の顔が並んだことである。それは、過去 - 現在 - 未来と教員 - 学生 - 職員の縊糸を、なお紡ぐことができる証しである。しかも「市場原理主義」に席卷され、無反省になびくことを正当化し自画自賛する無節操さが、それこそ「改革」の魂だと言われんばかりの中でのことである。立命館学園には、まだ良心のかがり火が煌々と燈されている。

「変質」がそういつまでも続くものでもあるまい。教職員や学生の心をつかまえない「変質」は、学園を愛する本当の持続的な力にはならない。私たちの希望は、みんなの真摯な反省の中から、立命館の民主主義が新しい姿で再生されることにある。様々な角度から発言された、このフォーラムの一つの成果は、「今のやり方にNo!と言い、しかし従前にそのまま戻るのではない、新しい民主主義的意思決定と執行のあり方を考えていこう」ということである。このことを土台として次からのフォーラムを企画したいと思っている。皆さんからの知恵も、どしどし事務局、世話人にお寄せください。

夢と誇りをもって立命館で働き、教育と研究をしてきた私たち退職者は、現在と未来を担う教職員・学生が、立命館での教育と研究に夢と誇りをもち、学びがい・働きがいのある学園に再生していく、一人一人の主体的な努力に力添えできれば、嬉しいと思っている。当日参加された人だけでなく、参加できなかった人にとっても、この冊子が、そのことに少しでも役立つものであるなら望外の喜びである。

（井上 純一）